

人的支援、教材提供、研修を柱に、英語を使う活動中心の授業を支援

東京都

東京都は、グローバル人材の育成に向けた英語教育について中長期的な計画を立て、様々な施策を実行している。小・中学校については、広域行政として、区市町村の取り組みを支援するというのが基本方針だ。事業は研修とセットで計画・実施するなど、着実に授業改善が進むようにし、事業終了後や担当者の異動後も、学校全体の取り組みとして継続できる手立てを講じている。

東京都 プロフィール

◎東京都では、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の成功とその先の東京都の未来への道筋を明瞭化するため、「2020年に向けた実行プラン」を策定。その中でも、グローバル人材育成については、「東京グローバル人材育成計画'20」を策定し、様々な施策を推進している。

人口 約1,375万人 面積 約2,193.96km²
 公立学校数 小学校 1,273校、中学校 617校、義務教育学校 7校、
 高校 186校、特別支援学校 62校
 児童生徒数 約97万人
 電話 03-5320-6867
 URL <http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/>

東京都教育委員会の施策

授業改善に着実に結びつくよう、取り組みの内容や進め方を工夫

東京都教育委員会では、座談会（P. 6～9）で言及したように、2018年2月、「東京グローバル人材育成計画'20」をまとめ、①授業の質を高める、②学ぶ時間・機会を増やす、③学ぶ意欲を高め、学び続ける、を基本方針として数々の施策を推進している（P. 7 図1）。その中心となるのは、人材の配置、教材の開発・提供、研修の実施だ。施策において留意するのは、持続可能なものにする事だと、指導部国際教育推進担当の瀧沢佳宏課長は説明する。

「各校が事業で得た成果を、事業終了後も生かしていけるようにするため、各学校や区市町村の実態に応じた取組になるよう進め方などを工夫するとともに、人材育成にも力を入れています」

例えば、小学校英語の教科化対応

では、推進事業と研修をセットで計画・実施する。2016年度から2年間の事業で、10地域を英語教育推進地域に指定。その地域を含めた25地区で38人の英語教育推進リーダーを指定し、該当地区には教員を加配した。英語教育推進リーダーに対しては、海外派遣研修を実施。TESOL*1によって自身の英語力や指導力を上げられるようにした。

「同時に派遣された中・高の英語科教員との交流の場も設け、小・中・高で一貫する英語力育成の意識を持てるようにしました」（瀧沢課長）

ほかにも、中学校に「生徒の英語によるパフォーマンスを高めるための指導資料」（DVD）を配布した際には、3年計画で中学校英語科教員悉皆の研修を実施。研修では、「東京都中学校英語教育研究会」の会長や



指導部
国際教育推進担当課長
瀧沢佳宏

たきざわ・よしひろ

東京都立両国高校副校長、東京都教育庁指導部、人事部、都立学校教育部等を経て現職。

元会長に、新学習指導要領の基本的な考え方などについての講演を依頼し、現場の実態に即した研修にしている。さらに、ワークショップを現場で活躍する指導教諭等を実施してもらい、研修を受けて終わらないよう、授業に落とし込むところまでを研修に組み込んでいる。

今後、柱となる施策は国際交流だ。多様な人々と対話し、新たな価値を創造するためには、その経験が重要になると、瀧沢課長は語る。

「外国人と直接交流する意義がますます高くなると捉え、訪日外国人との交流の充実に取り組んでいます。多様性を理解し、寛容性を高めて、他者と良好な関係を築いていく力を、子どもたちに育みたいと考えています」

*1 Teaching English to Speakers of Other Languages の略。英語を母国語としない人に対する英語教授法。第二言語習得理論、語彙・文法・発音などの教授法、カリキュラム、指導案、評価法などを学ぶ。

江東区立有明西学園の実践

五感を使ったコミュニケーション活動で「使える英語力」を育む



◎ 2018 (平成 30) 年、江東区初の施設一体型、9年間一貫教育の義務教育学校として開校。多種の木材を床や壁、柱などに多用した校舎も特徴的。

校長 本多健一朗先生

児童・生徒数 前期課程 (小学生) 556 人、後期課程 (中学生) 71 人

学級数 前期課程 18 学級、後期課程 4 学級

電話 03-3527-6401

URL <http://ariakenishi-gakuen.koto.ed.jp/>

授業づくりのポイント

子どもの主体性発揮のため、五感を刺激し、題材を工夫

2018年4月に開校した9年間一貫の義務教育学校・江東区立有明西学園では、前期課程 (小学校段階) から英語教育に重点を置く。外国語活動の年間授業時数は1・2年次が12時間、3・4年次が35時間、教科担任制となる5・6年次が70時間だ。

5・6年次の外国語活動を担当する吉岡宇乃先生は、「本物のコミュニケーションを体験する場をつくり、必然性を感じる学びを通して『使える英語力』の育成につなげたい」と語る。まず大切にするのは、コミュニケーションのマナーだ。授業では「eye contact」「finger-tip (手を前に伸ばして指先が触れるくらいの距離

感)」「smile」「clear voice」を重視し、毎回、よい例と悪い例を子どもと一緒にロールプレイする。

「英語に限らず、豊かなコミュニケーションを生み出すために、4つのマナーを繰り返し伝えるときにも、私が子どもたちのロールモデルとなるよう努めています。相手に大切にされていると、子どもたちは安心して、自分を積極的に表現するようになります」(吉岡先生)

どの子どもも主体的に活動できるよう、五感を使う活動をバランスよく取り入れることも重視している。

「以前は絵カードなどの視覚教材が中心でしたが、聴覚や触覚に敏感な子どももいることに気づいてからは、視覚に偏らず、五感をバランスよく刺激するよう教材を工夫しています」(吉岡先生)



主任教諭

吉岡宇乃

よしおか・うの

外国語活動担当。5学年担任。2016～17年度、東京都英語教育推進リーダー。

例えば、文字の形からアルファベットへの理解を深めようと使ったのが、A～Zの形をしたカラフルなブロックだ。好きなブロックを1つずつ選び、その文字の名前や色について説明し合う活動を行った(図1)。

さらに、子どもにとって身近な題材を取り上げることで、子どもの興味・関心を喚起し、学習意欲につながっている。例えば、同校の学区には東京オリンピック・パラリンピックの競技予定会場が数多くあり、子どもはその開催を非常に楽しみにしている。そこで、開会式は参加する国・地域が名前のアルファベット順で入場することに注目させ、国旗を入場順に並べる活動をグループごとに行なった(写真1)。

「子どもがよく知っている題材を取り上げると、『やってみたい』『伝えたい』といった気持ちが自然と湧き起こります。『国の名前を知りたい』『順番に並べたい』という意欲は高く、グループ内で話し合いながら生き生きと取り組んでいました」(吉岡先生)

授業の振り返りでは、「開会式では入場の順番にも注目したい」と述べた子どももいたという。

図1 5年次「アルファベットに慣れ親しむ」授業の流れ

イントロダクション	日づけや天気など、教員が話す英語を聞き、板書された英語を見て、全員で発声する。
アルファベットブロックを使ったやり取り	自分が選んだアルファベットブロックの文字の名前や色について、ペアで説明し合う。教室内を歩き回り、できるだけ多くの友だちとやり取りする。
アルファベットソングを歌う	アルファベットソングの動画を視聴し、目と耳からインプットした後、再度、動画を見て、それに合わせて全員で歌う。
世界の国旗をアルファベット順に並べる	映像でオリンピック・パラリンピックの開会式の参加国・地域の入場順に注目させ、グループごとにアルファベット表を見ながら国旗を順番に並べる。
学習の振り返り	子どもが本時で学んだことを発表する。

*江東区立有明西学園提供資料を基に編集部で作成。

写真1 国旗に国名が書かれた視覚教材を用いた活動でアルファベットの理解を深めた。サッカーのFIFAワールドカップの直後の授業で、国旗を見ただけで国名を答える子どももいた。

小・中の接続への対応

前期課程の学習内容を定着させ、後期課程への学習意欲につなげる

後期課程（中学校段階）の英語学習への接続も重視している。同校では「英語プロジェクト部会」を設置し、校内の英語環境の整備について検討したり、前・後期課程の指導内容をすり合わせたりしている。そうした話し合いを通じて、前期課程における英語での豊富なコミュニケーションの経験が、後期課程の学びの支えになるということが、学園全体の共通認識となっている。

「6年間の豊かな英語コミュニケーション活動を通して、簡単な英語に多く触れる経験をしていけば、後期課程で一段上の活動をした時に、『こ

れはどのように表現すればよいのだろう』といった疑問につながるでしょう。そして、語彙や表現方法をもっと増やしたいという意欲が高まり、主体的に英語学習を進めていけるようになると考えています」（吉岡先生）

小学校英語の教科化に向けて、文字指導についても話し合った。

「中学生段階になると読み書きの指導が入り、授業についていけず英語学習から遠ざかってしまう生徒が見られました。そこで、5・6年次に読み書きの入門となる内容を取り入れています」（吉岡先生）

吉岡先生は校内研修にも力を注ぎ、教員の指導力の底上げを図っている。

「放課後に自由参加の研修を行い、デジタル教材を使いながら一緒に指導法を確認したり、外部研修の成果

を共有したりしています」（吉岡先生）

吉岡先生は、2016～17年度、東京都英語教育推進リーダーとして区立小学校の英語研修を担当した。その経験を踏まえると、教員の英語指導力の向上には、教員研修を充実させて、教員一人ひとりに指導への自信をつけさせることと、教材研究の効率化が重要だと語る。

「多忙な中で、なかなか自信が持てず、慣れない英語教材の研究や作成に苦勞する先生方を大勢見てきました。受け持ちの子どもたちが関心を持ちやすい身近なテーマを扱っている教材を探すのには時間がかかります。テキストに付属している指導案を活用するとともに、教材の素材集を共有することで、授業の充実を図っていきたいと思います」（吉岡先生）

国分寺市立第一中学校の実践

タスクを目標としたプロジェクト型授業で、英語4技能を統合的に育成



◎ 1947（昭和22）年開校。確かな学力と豊かな心を育む一方で、東京都「スーパーアクティブスクール」の指定を受け、体力向上にも力を注ぐ。

校長 後藤正彦先生
生徒数 596人 学級数 17学級
電話 042-322-0641
URL <http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/smp/kurashi/1012309/1008645/1001229/index.html>



指導教諭

相沢秀和

あいざわ・ひでかず

教務主任。英語科。2014年度、東京都英語教育戦略会議専門部会委員。2017、18年度、東京都「生徒の英語によるパフォーマンスを高めるための研修」講師。

どで活用することで『使える』ようになっていきます。プロジェクト型授業では、そのプロセスに沿って『使える英語力』を育成しています」

授業では、教科書のレッスンごとに最終目標となる活動として、自己表現を行うタスクを設定。その活動のために必要な力を、各回の授業で学んでいくという流れになる。

タスクは、レッスンの内容に合わせて、スピーチやプレゼンテーション、ショー・アンド・テル^{*2}、さらに臨機応変な対応が求められる会話形式のシミュレーションテストなどを設定。ほかにも、スピーチ原稿の作成など、小さなタスクを各回の授業に組み込んでいる。

授業の工夫

自己表現を行う活動を目標に毎授業で学びを積み上げる

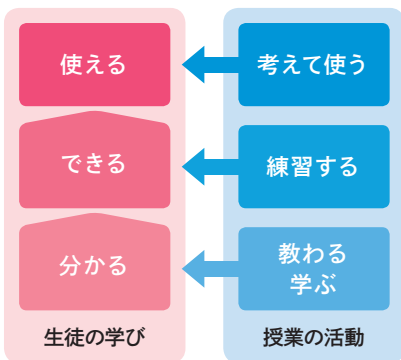
国分寺市立第一中学校は、「東京都教育ビジョン」に示された「使える英語力」の育成に向け、レッスンごとの目標となる活動を設定して学習を積み上げるプロジェクト型授業を

全学年の英語科で推進している。指導教諭の相沢秀和先生は、そうした授業で、「分かる」「できる」「使える」のプロセスを経て英語力を伸ばしていくと説明する（図2）。

「授業で教わったり自ら学んだりして『分かる』ようになり、練習を繰り返して『できる』ようになります。さらに、自分の考えを述べる活動な

*2 大勢の前でテーマに沿って話す活動のこと。

図2 「使える英語力」の育成のプロセス



* 国分寺市立第一中学校提供資料を基に編集部で作成。

ワークシートは、生徒がタスクで力を発揮するために必要な学習の要素や順序を教科団で検討して、1回の授業ごとに作成。学年共通とし、それぞれの少人数・習熟度別編成クラスで学習内容や進度、評価規準などの足並みをそろえている。

ワークシートの冒頭ではタスクを明示し、生徒に学習の見通しを持たせる。例えば、2年生の受動態を学ぶレッスンでは、「住みたい国をプレゼンテーションしよう」をタスクとし、「このレッスンでは、住んでみたい外国についてプレゼンテーションします。そのために、動作を受けるものごとを主語にした表現〔受動態〕や国の文化などの説明の仕方について学びます」と具体的な学習内容を示した。

授業では、教科書を基にした文法や表現の学習、音読、ペアでのやり取りなど、4技能をバランスよく伸ばす活動を意識して取り入れ、生徒の「分かる」や「できる」を少しずつ増やしていく。

「『この学習はプレゼンテーションの際にこのように活用します』など、学習内容をタスクに結びつけて伝えるようにしています。生徒は目的意識を持てるため、集中力が途切れず、意欲的に学んでいます」(相沢先生)

4技能の育成は、毎授業の帯活動でも行っている。1年次から定型質問文とその答えをペアで言い合う活

図3 2年次 受動態のタスクのルーブリック

Date:		8th Grade English Worksheet			
LESSON 8 ④		住みたい国をプレゼンテーションしよう			
Lesson Task		プレゼンテーション発表本番 (評価用紙)			
<p><外国紹介プレゼンテーション発表 評価規準></p> <p>①暗唱、目線：原稿を見ないで、みんなを見ながら発表ができる。 [コミュニケーションへの関心・意欲・態度]</p> <p>②声 量：みんなに聞こえるように、はっきりと大きな声で発表ができる。 [コミュニケーションへの関心・意欲・態度]</p> <p>③発表方法：自分の住みたい国をより皆に分かってもらうために、絵や写真、表などを効果的に利用したり、表現に強弱をつけたりなどして発表ができる。 [コミュニケーションへの関心・意欲・態度]</p> <p>④発音：英語らしい発音に気をつけて発表ができる。 [外国語表現の能力]</p>					
組	番	<input type="checkbox"/> 相沢クラス <input type="checkbox"/> クラス <input type="checkbox"/> クラス	氏名		
評価項目	1	2	3	4	5
暗 唱	原稿を読んで発表した	だいが原稿を見てしまった	アナウンサー読みで発表した	時々原稿を見てしまった思い出しながらの発表	原稿を暗唱してスムーズに発表できた
顔上げ	原稿を読んだ	原稿読みながら数回頭を上げた	英語を言うときは顔を上げた	顔を上げて発表できた	多くの聞き手にアイコンタクトしながら発表できた
声 量	ほとんど聞こえない	聞こえないところがある	一応聞こえる	十分に聞こえる声	はっきりと聞きやすい大きな声
発表方法	資料の利用発表の表現できていない	資料の利用発表の表現あまり効果的でない	資料の利用発表の表現どちらか有効	資料の利用発表の表現どちらも効果的	資料の利用発表の表現とても効果的
発 音	カタカナ読み	カタカナまじり	英語らしい発音を意識	英語らしい発音があった	とても英語らしい発音があった

* 国分寺市立第一中学校提供資料を基に編集部で作成。

動を積んで会話力の基礎を養い、2年次2学期からはペアで1分間の会話を続ける「One Minute Chat」を行う。さらに、3年次2学期からは、即興の1分間スピーチをペアで行い、聞き手が語数を数える「Word Counter」を取り入れるといったように、活動のレベルを徐々に上げ、表現力やコミュニケーション力を着実に高められるようにしている。

評価の工夫

ルーブリックによる評価で到達度と課題を具体的に把握

ワークシートには、評価規準とルーブリックを明記。評価の観点を生徒と教員が共有し、意識すべき点があるかが、生徒に分かるようにしている(図3)。そして、タスクを行った後には、そのルーブリックに評価を記入し、生徒に渡す。さらに、学期ごとに全タスクのルーブリックによる評価をまとめた個票を作成し、生徒に渡して保護者のサインをもら

うようにしている。

「各学期の評価は、タスクと定期考査の結果を基に行っています。評価の根拠は、誰の目にも明らかであるべきだと考え、ルーブリックによる評価を取り入れました」(相沢先生)

自己表現活動であるタスクでは、スピーキングやライティングの力を問うため、定期考査では、リーディングやリスニングの力を測る問題に比重を置いている。

プロジェクト型授業のよさの1つは、どの学力層の生徒でも英語力を伸ばしやすいことだと、相沢先生は実感している。

「タスクでの目標規準は自分の英語力に応じて設定できるので、生徒は『自分ができるところまで頑張ろう』という気持ちで取り組みます。また、ルーブリックでは、何ができて、何ができていないかが具体的に分かるため、次は何を頑張ればよいか分かりやすいことも、学習意欲の向上につながります」

そうした授業を通して、生徒に「使える英語力」が着実に育ちつつあることを、相沢先生を始めとした英語科教員は実感している。

「東京都の学力調査などで成果が見られるだけでなく、シミュレーションテストなどでも、予期せぬ質問に即興で英語で答えられる生徒が増えました。生活の中で英語を使う場面に出会った時に、対応できる力がついてきたのではないかと手応えを感じています。今後は、生徒が英語で考え、英語でその考えを発信できるよう、授業をさらに工夫していきます」(相沢先生)